



— 第39回 —

長い時を受け継ぐ

板ノ沢のカヤ人形づくり

さわめ ゆたか
沢目 豊さん

MEMO

深持地区の板ノ沢集落で今に伝わるカヤ人形作りは、昨年11月、風俗慣習の分野として初めて市の無形文化財に指定されました。高さ3メートルに及ぶ男女一対のカヤ人形と、足元に並べ置く小さな人形を住民が共同で作成し、地区の御瀧大龍神社に奉納します。

江戸時代以前に始まったとも言われ、人形の大きさから県内外でも特異とされるこの風習を残すのは、2年前に同地区の梅集落が休止して、板ノ沢集落だけとなりました。

およそ300年前の古絵図にも名が刻まれる板ノ沢。その頃から伝わるというカヤ人形作りの先導を、現在、町内会長として受け継いでいるのが沢目豊さんです。

勤め人や子どもたちも参加できるようにと、近年の恒例となった『海の日』に行う作業を呼びかける文書にも、「市の文化財に指定されたのだから、一家一人と言わず家族も足を運んで」としたためました。

大きなカヤ人形。集落の64戸から一人ずつと子ども会、合わせて約100人の地域のかたがたが集まって作ります。集落にかかる道の上と下の地域で、それぞれ女と男のカヤ人形を担当するのが習わしと言い、主に高齢者や子どもたちは、稲わらで作る男女一対の小さな人形を担当します。それぞれ作り方は異なりますが「どの人形作りも50代の継承者がたくさん育っている」と沢目さんは話します。

少子高齢化は承知の上。若い人の参加を促し、若い人に覚えてもらうことを、地道に取り組む様子が見えます。

「自分が町内会長のときに人形が文化財に指定された」と、重責と注目の高さに戸惑いますが、「地域に伝わる人形作りも、その人形に手を合わせる住民の姿も、私たちににとっては当たり前ものだから、無



7月20日 今年もカヤ人形を奉納しました

くすことはできない」と話し、「町内会の総会で文化財指定をみんなに伝えた時は何ともないようにしていたけれど、指定書を見て喜んでいたら」と、地域の皆さんの静かな自負を感じたようです。

「人形制作のときはめつたに雨に当たらない」と言う沢目さん。「完成したら神社に奉納し、人形は一年間立ち続けます。昨年のは、女、男、小さな人形の順に重ねて火を放ち、焼却します」

使命ある限り、精一杯勤めるだけ。代替わりして立ち続ける『板ノ沢のカヤ人形』が大切なことを教えてくれるようです。